
強さの定義

紫苑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

強さの定義

【Zコード】

Z6870S

【作者名】

紫苑

【あらすじ】

魔法が普通に存在する世界ユステニアある時歴史的大事件がおこつた一人の赤ん坊が生まれた。

その家は超有名な家で世にすばらしい魔法使いを輩出している家だったしかし、その赤ん坊は魔力がまったくなかつた。しかし彼はいつか魔法が発動するそう信じて血が滲むような努力をしたが魔法が発動せず、7歳のとき父親にすてられてしまった。

9年後

少年は死んだかとおもわれていたが、なんと彼は自由気ままに生き

ていた。そんな落ちこぼれな彼が織りなす学園ストーリー。

この作品は主人公最強作品です。嫌いなたはもどるをおしゃがつてください。あと過度な期待はしないでください。

「これが俺の世界観&プロローグ（前書き）

どーも紫苑です。今回の作品は処女作です。なのでここ表現おかしくね？とかおもったかたどうぞ報告してください。あと誤字脱字アドバイス、感想などどんどん言ってくれるとうれしいです。

これが俺の世界観&プロローグ

魔法が普通に存在する世界ユステニアこの世界でわ魔法が使えることが大前提でありどんなに身分が低いものでも魔法が使えないなんてことはまずない。そしてもうひとつ誰でも火土水雷風のどれか1系統しか使えない。しかし人には潜在的能力があるそれをあるきつかけで覚醒したものをアビリティーといふこれは数に制限がなく水系統の人人が火の魔法を出せるのこういった理由である。まだ言ってなかつたが、ここは魔法がものをいう実力至上主義、当然魔法には優劣がある。より優れたものが上へ劣るものはどんどん墜ちてしまう。そして、時代が進んでいき、王が誕生しそれを護衛する貴族火水雷土風のそれぞれ優れた系統をもつた家に任命した。これを五大貴族といふ。そして個人としてより最も優れた12人に契約者と名乗らせるようにした。そして、1994年、歴史的大事件が起こつた。ある家に一人の男の子が生まれた、その子が生まれた場所は先代の頭首が火の精靈王と契約した由緒正しき家不知火家その不知火家は今や5大貴族のひとつに任命されている。その家になんと魔力がない赤ん坊が生まれてしまつた。

それがこの話の始まりだ。

狂つてゆく運命（前書き）

どーも紫苑です。

小説つて書くの難しいなと思いました。

@文才がほしいですww

でわ2話ですww

狂つてゆく運命

深夜3時普通の人間なら寝ている時間、そんな時間にも関わらず騒がしい家があつた、なぜそんなに騒がしいのかその理由は、かの有名な不知火家の当主の妻不知火麗子が、もうまなく出産をむかえようとしていた。それを聞いてマスコミや報道陣が今にも乱入してきそうな勢いだつた。

「ハアハアハアハアハアうー痛い！！・・」と苦痛を顔にゆがませている麗子に夫の不知火重英は我も忘れて必死に叫んでいた。「頑張れ、お前なら必ず元気な子を産めるだからもうちょっとの辛抱だ。」

そして麗子の手を強く握り頑張れと叫んでいた。そして、ついに「う、産まれる――」と今日一番

の悲鳴を上げると次に「オギヤー オギヤー」と元気な赤ん坊の泣き声が聞こえてきた。「ハアハアついにやりましたわ。やつとでてくれた。」と息を切らせながら感嘆を漏らすと麗子は愛おしそうにその赤ん坊を抱き締めていた。「私にも抱かせてくれ」と重英が言つてきただので落とさないようになると忠告しておいて

赤ん坊をそつと渡した。「こいつちょっと大きな」と赤ん坊を持つた感想述べていた。「ねえあなたこの子の名前決めません?」そう言つて麗子が言うと重英も了承した。とその時、コンコンという音がした。重英は「入れ」と嬉しそうに言つた。「失礼します」といかにも長年仕えてる執事ですよ的なオーラを纏つた執事が入ってきた。「セバステルかこんな深夜まで御苦労だつたな。」セバステルと言われた男は柔軟な笑みを浮かべて「いえいえ麗子様が頑張つてのに私が寝る訳にはいきません。」そう強気に言つた。

「それと遅れましたがご出産おめでとうございます。元気そうな子ですね」ホツホツホと孫ができたかのように笑つていた。「ありがとうセバステルそういえばこの子の名前を決めませんと」「そうだ

な、では遊璃^{ゆり}というのはどうだ?」いつもクールな重英がこの時は、とてもテンションが高かつた。「いいですね。セバスティルはどう思います?」「すばらしい名前ですね」「では遊璃これからは、不知火家に恥じぬように頑張ってくれよ。」「あなた今遊璃に何言ってもわかりませんよ」それもそうだな。と薄く笑つた。そんな幸せな時間が崩れるのは早かつた。

4年後

ぼく、不知火遊璃は産まれて1歳でハイハイできるようになつて2歳で立てるようになつた。3歳で文字が読めるようになつた。家庭教師の先生は「すごいですねー1000000人に1一人の逸材ですね」となんだかキラキラした目でしゃべつていた。お父様は「そうか」それだけ言つていた。それからこの世界のことを勉強し始めた。家には魔法学の本や薬草の扱い方の本、魔物の本、なかには猿でもわかる世界の常識これ知らないと、猿以下だね。と「人をバカにしているんだろうか?」と思わずツッコンでしまいたい物だ。中を除いてみると、「テキトーな絵と文が連なつていた」。しかし、読んでみると結構読みやすかつた。これを纏めてみると、世界には優れた貴族が5個あつて不知火家、シャルル家、フリードリッヒ家、ファブレ家カンナヴァー家がある。それを5大貴族と呼ぶ。5大貴族は一家に1つ領地が与えられそこを統治する義務がある。そして王都の護衛つまり王様が危険にさらされた時、全力で死守しなければならない。

次に極北にある「暗黒街」そこは法もなにもない無法地帯が広がっている。犯罪者、死刑囚、生きる希望を亡くした者、理由は十人十色だが、その町では、略奪、殺人、強姦そんなことが日常茶飯事に起ころ。もはや人間であつて人間でない・・・そんなやつらが集

う街。

暗黒街の住人は、世間では「*ノミ*」*ノミ*同然いやもしかしたらそれ以下かもしれないらしい。ぼくはそれを読んで心底怖くなつたので次の項目にいった。次はギルドについて、ギルドは増えすぎた魔物の討伐、魔鉱石の発掘、魔物の素材、薬草の調達、盗賊の討伐などいろいろあるそして、ギルドにも知名度がある。より多くの依頼を受けて知名度を上げれば、難易度の高い依頼が来る。しかし、大きな犯罪を犯した者や、ギルドは「*デッドギルド*」、個人ならばレッドリストに追加される。あとギルドは国王に選抜された5つのギルドに統治されている。次は魔物の話だ。魔物、それはどこからきたのか、そんなものはわからないしかし、かなり昔からいるらしい。魔物は危険度がありG Sまであり危険度が高いほど良い素材がとれる。あとはこの世界にはマナというものが存在している。マナというのは、生物の伊吹などのように作られているのかはわからないが、一説によると精霊が作っているらしい。そのマナが結晶化したものをエリクシルと呼ぶエリクシルは魔物を拒絶する能力がある。人々はそれを加工して、結界を作つた。この発明により、人々は魔物の魔の手から救われた。最後にこの世界には迷宮やダンジョン、パワードままである。

まだ調査されてないところがたくさんあり、その最下層には武器やアイテムなどが眠っている。この武器やアイテムをエンシェントウエポンと呼ばれている・・・そこまで読んでぼくは本を閉じた。時刻をみると9時だったのでぼくが風呂に入ろうとするセバステルが坊ちゃまと呼んできた「何セバステル？」

「1週間後魔力測定と系統を調べますので」僕はそれを聞いた瞬間セバステルに抱きついて「それホント?」と何度も聞いた。ついに魔法が使えるようになる。そう思つとうれしくてうれしくてたまらなかつた。もつと早く魔法を習いたかったけどお母様が「4歳になるまでダメですよ。」といわれていたので練習さえさせてもらえないかつた。だから体術を学んだり本を読んでいた。

その夜から興奮しすぎてあまり寝付けなかつた。

1週間後6月27日そこで前代未聞の事件が起こり、僕の世界は180度逆転してしまつた。・・・

朝10時 僕は魔力測定を行う場所に来ていった。周りにはたくさんカメラを持った人達がいてその中心には僕とお父様とお母様がいる。そして前方には青い水晶玉がある。この水晶は魔力を流された量で色が変わるらしい。Sは虹色、Aは金、Bは銀、Cは緑、D黄、Eは赤となつてゐるらしい。考え事をしている内にお父様に呼ばれた。「遊璃、この水晶に手をあてて水を流し込むようなイメージをしろ。」そういつて青い水晶を指す「わかりました。」そして青い水晶に触れて、水をイメージそして、それを水晶に流し込んだ。しかし、いつまで経つても青色のままだ。カメラを持っている人たちは、信じられないような物を見たかのように騒ぎだし、お父様はもう一回やつてみろ！！と怒鳴つた。この時僕は今までにない程に焦つていて。「とりあえず何色にでもいいから変化してよ」そう願つた。しかし、水晶は僕の願いをあざ笑うかのようにいつまでたつても色は変わらず、青いままだつた。お父様は憤慨し部屋を後にしてお母様は、その場で泣き崩れていた。僕は、何にも変えられない怒りと不甲斐なさで涙を流していた。

その日は、この事件のことでもちきりになつた。あの有名な不知火家の息子に魔力が存在してない。魔力0の子供現るなどなど大きく新聞に載つていたが1ヶ月後にはそんな話はデマだと不知火家の権力で情報を弄つてその事実を捻り潰した。それでも噂どいうものは一度流れたらなかなか止まらない。みんなは知らないふりを

して不知火家の息子は無能だということを知っている。それからこの話は有名になり、「不知火遊璃」の名前は、誰でも知つていて当然の事項になってしまった。

そして狂いだした運命は止まることを知らない。ここからは残酷で醜く最悪の展開になる。

狂つてゆく運命（後書き）

誤字脱字あつたらコメよろしくへです
www

少年の強さの定義（前書き）

良かつたら感想＆アドバイスおねがいします。

前代未聞の大事件から1年がたつた。不知火遊璃は苦痛の日々を送っていた。自分の部屋から一步でも出でてしまえば、メイドや使用人から白い目で見られた。中にはヒソヒソ話をしている人もいた。別にヒソヒソ話はどうでもよかつたけど、自分に聞こえるように「あいつ早くこの屋敷から消えないのかな？」

「不知火家の恥さらしめ」

「なんで生きてるの？」

そう悪口をいわれるのは、胸の奥がぐつと締め付けられとても苦しくて泣きたい衝動に駆られた。
けど我慢して泣かなかつた。

だけど痛かつた。

体術の鍛錬をしていて、よく怪我をするけどそんな怪我は1週間もたつたら治つた。

だけどこの胸の痛みはずつと消えてくれなかつた。

しかしほくは、外では平然としていた。ヒソヒソ話も悪口も聞かないようになつた。

だけど自分の部屋に戻るとせき止めていたものがどんどん溢れていった。それを抑えることなんて僕にはできなかつた。
そればかりか、傷ついた傷口がどんどん広がつていつた。

誰かにこの傷口を埋めてほしいけど、その傷を埋めてくれる人はいなかつた。

だから余計悲しさが増した。

そして毎日泣きながら思つた。

「ねえなんでなの神様？」

「なんで僕だけ魔法が使えないのかな？」

「僕もお父様のように炎の魔法を使いたいよ。」

「もう僕悪口いわれるのいやだよ！……！」

少年は神様にそう問いただが、答えは返つてこなかつた。
そつして夜はどんどん過ぎて行つた。

朝7時 ベットから起きて、また憂鬱な一日始まるなあと思つて
いたら、ドアがコンコンとなり、老人が入つてきた。

「おはようございます坊ちやま。」

「おはようセバステル」

ぼくはできるだけ微笑んで笑つたけどセバステルは心配そうに僕を
見つめていた。

こんな僕でもセバステルとお母様だけは僕のことを心配してくれた。
だけどお父様は口さえ聞いてくれない。

「坊ちやま今日はどのようなご予定でしょ?」

「いつもどおりだよ。」

「そうで、」
やいりますか。では朝はんができますので冷めないう
ちに召し上がつてください。」

「わかつたよ。すぐ行くよ。」

「では失礼します。」

そう言つてセバステルは仕事に戻つた。

食卓にいくとお父様とお母様それと従妹の不知火蘭と蘭の両親の不
知火綾香と陽が座つていた。

珍しいなあと思いつつ挨拶した。

「おはようございますお母様、お父様、」

「伯父さま達もおはようございます」

しかし、返事は返つてこなかつた。

それは当り前の事だつた。

だつてぼくは、僕の存在はまさしく害虫、お父様や伯父様何もして

ないのに、僕のあの事件のせいで恥もかいたはずだ。

なので嫌われても仕方ないむしろセバステルやお母様のほうが珍しいのだ。

場を気まずくしないために早く」飯を食べてある部屋に行つた。
そこは、あの事件が起こつた場所、魔力を測定するところだ。
そこには魔力を測定する、水色の水晶玉だけが机の上に乗つている
殺風景な部屋だった。

そんなことを考えてると、部屋の前に着いた。
ドアを開けると、よつしゃあー上がつてるとかあんまり変わらない
なあーそんな声が聞こえる。
どうやら先客がいたようだ。

顔見てみるとぼくをよくいじめてくる子達だった。
その中のガキ大将的な存在の奴が僕を見つけると、まるで新しいお
もちやが来たかのような眼で僕を見て
近寄ってきた。

「おい、落ちこぼれが何でこんなところにいるんだ？」

「ここは、魔力を測るところでちゅよ。」

「道に迷つたんでもちゅか？お兄ちゃんが教えて上げましょうか？」

そうバカにして爆笑していた。

周囲もそれに釣られてゲラゲラ笑いだした。
僕はそれを無視して目をつぶり、

「ハアアアアア」

水晶に手をあて水を流し込むようにイメージした。
目を開けて見てみたが、目の前にあるのは、イメージをする前の水
色をした水晶玉だった。

それを見て周りの奴は

「ハハハハ こりや傑作だ。本当にお前ザコだな。」

「落ちこぼれ君はどんな魔法がつかえるんですかーー？」

僕がその言葉を聞いた時、僕はどんな表情をしていただろうか？
憤怒？
悲哀？

悲哀？

僕にはわからないでも僕は相手を睨んだんだと思う。
それにきずいたガキ大将は、僕の胸倉をつかんで怒鳴ってきた。

「おい、てめえなんか文句でもあるのか?」

「べつに何でもないよ」

「お前さつき俺を睨んだだろ?」

「いや睨んでないよ」

「嘘つけ!!」

「もし睨んでいたなら謝るよでも悪気はなかつたんだ。」

「ごめん」

「チツ」

「まあいい今度そんな態度とつてみるただじやすまないぜ?」

「そういうつて4人とも出て行つた。」

4人が出て行つたのを見て、僕は思いつきり壁をけつた。

「クソ」

あの時言い返せない自分が情けなくて死ぬほど悔しい。
でも逆らえない。

なぜつて?

理由は簡単。

あいつらが魔法が使って、僕が使えないからだ。
この差は大きい。

あいつらは腐つてもちよつとは不知火家の血が流れているから下級
の火の魔法を使える。

相手が一人ならなんとかできるけどさすがに4人は無理だ。
だから僕は思う。

「欲しいんだ」

何にも屈さない力が 絶対的な力が

自分の強さが貫き通せる強さが・・・・・

僕の結論から言つとあいつらが悪いんじやなくて弱い自分が悪いん

だと

あいつらが強者で僕が弱者ただそれだけだ。

動物でもそうだ、弱い者は殺され、強い者が生き残る。

僕がシマウマであいつらがライオン

僕が平民であいつらが貴族

ただそれだけ。

強い奴だけがこの世界に生き残る。

それが僕が思う強さの定義。

朝から胸糞悪い気分になつたので、紅茶でも飲んで勉強しようと思つたので、セバステルに頼んで紅茶を入れてもらい勉強をした。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

コンコン

「はい」

ガチャ

「セバステルです。」

「何が用？」

「坊っちゃんもお昼ですよ。」

「え？」

よほど集中していたのか、もうお昼になつてしまつていた。

ご飯でも食べるか、そう思いセバステルに頼んでサンドイッチを作つてもらい庭で食べた。

サンドイッチを食べた後あるところに向かつた。

そこは屋敷から500m先にある魔法訓練施設「ガスファロスト」不知火家の領土の子供や大人が魔法の訓練や体術に励む場所で多くの偉大な魔法使いを輩出している場所。

そこには、鬼の教官やら不知火流体術を教えてくれる師範などがいて、戦闘に関してのノウハウを叩き込まれる場所である。

広さは、王都の王宮と同じくらいの大きさらしい。

僕は行つたことがないので、王宮がどのくらい大きいのかしらない

けど・・・

実際4歳からきていのが1年たつても地図を見ないと必ず迷子になつてしまつ。

だから無駄に広い分誰もいないところで魔法の練習をする。まあ成功をした試はないんだけど、それでも弱い魔法でもいいから使えるようになりたい。

こうしていれば、いつかはつかえるんぢやないか？そつまつ願望というよりかは自己満足なんだろうけど

、それでも何もしなりかはこつちのがしょづに会つてゐる。とりあえず練習しよ・・・・・・

「火球よ我が意志に答え具現せよ」

「ファイアボール」

詠唱をして術名を叫んだが火はあるか何も起らなかつた。

あああああああ、、

「ファイアボール」
「ファイアボール」
「ファイアボール」
「ファイアボール」
「ファイアボール」
「ファイアボール」
「ファイアボール」
「ファイアボール」

そう叫び続けたがやつぱり火が出ない。

わかつていていたけどやつぱつらいなあ・・・・

1時間ほど魔法の練習を続けた。

周りから見たら無駄な氣がするが練習を終わらした。

次は僕が最も得意とする体術を教えてもらうために30分ほどかけて教官室に行き、ある人物を探す。

「コンコン」

「緒方師範いらしゃいますか？」

奥からホーイという声が聞こえた。

覗いてみると、白髪の老人が笑みを浮かべて歩いてきた。

「こんにちは、師匠」

「オオ、遊璃か、今日も鍛錬かの？」

「はい。お忙しくなかつたらでいいのですが・・・」

「わかつた。まつとれ。」

しばらくすると、着替えて出てきたので鍛錬室に向かつた。

鍛錬室に着くと準備運動をして組み手をした。

「行きますよ師匠」

「来い」

先攻したのは僕だった。

1年間で徹底的に走りこみをしたぼくは5歳児とは思えないすばやさで相手に向かつていた。

前に全力で拳を振るつたように見せかけた。しかし、それはフェイク師匠はガードしようとしていたので

一瞬で後ろに回り込み後頭部を狙つたが、殴る前に、裏拳が飛んできた。

「クツ」

とつさにガードしたが、吹き飛ばされた。

「なかなか良かつたがな。まだまだ甘いのよ」

ほほほほほと高らかに笑つている。

「まだまだ」

と果敢に突つ込んだが圧倒的な力差があり、また吹き飛ばされた。

それでも僕は立ち上がり一心不乱にパンチの応酬、しかしヒヨイヒヨイと避けられてしまう。

そうして

手を掴まれ背負い投げで投げられそうになつたが、僕はただでは投げられまいと思い、器用に着地してカウンターで背負い投げをしたけど、師匠は器用に着地して僕の足を高速ではらいお腹に強烈な回し蹴りを繰り出した。

不知火流体術「獅子脅し」

僕は「しまつた」とおもつたけど時すでに遅し。

強烈な痛みが腹に来てそのあと、浮いた感じがしたけど、ブツ飛ばされた事を悟りあまりの痛さに意識を手放した。

次に起きたのは、次の日の昼だった。

師匠曰く本気でやりすぎたらしい。

今日は鍛錬をする気にもなれず軽いジョギングと魔法の練習をして寝た。

次の日またガスファロストで緒方師匠に不知火流体術を教えてもらつていてるときに、ふいに緒方師匠がこんなことを言つた。

「急ぎよ一ヶ月後、不知火家領内で武道大会があるからお前も出る。

」

「へ？」

「だからお前が武道大会に出るのじや

「・・・・

「ほんとにぼくがでれるんですか？」

「心配するな、お前の実力なら蘭くらいしか相手にならんだらう。」

「え？ 蘭もでるんですか？」

「そうとも」

ぼくは内心わくわくしていた。

蘭は歴代不知火家の中で魔法のセンスがいいという事で有名だったけどそれだけにとどまらず、接近戦でもかなり強いらしい。

一度手合させしたいと思っていた所だった。

俄然やる気が湧いて来た。

「ホツホツホ楽しそうな眼をしょつて」

緒方は微笑ましく笑つていた。

当の本人は

「さあ一ヶ月後が楽しみだ。」

そう生きこんでいた。

少年の強さの定義（後書き）

誤字脱字あつたらコメントトよろしくへへへへへへ

従妹の登場＆武道大会（前書き）

ちやお～紫苑ですりアル忙しすぎて投稿遅くなりました。しかし、
まだまだ続くので暖かく見守つてください。

従妹の登場 & 武道大会

1ヶ月後僕は世界でも有名な不知火領の闘技場コロシアムにいた。

「すごいなー初めて来たけど大きいなあ。」

僕が口を開けて見ていたら、背中を後ろから叩かれた。

「イタツ」

「おはようございます。兄さん」

僕は目を丸くしたと同時に内心かなり焦った。

「え? なんで君がここにいるの?」

彼女は意地悪が成功したのが嬉しいのか笑っている。

僕はがなんで驚いたかというと彼女「不知火蘭」が普通にしゃべりかけてきたからだ。

普段は叔父さんにかかわるなどでもいわれているのだらつ。

なんだか久しぶりに話した気がする。

今考えてみると、あの事件が起こつてから話したことがない。

そんなことを考えていたら、蘭が話しかけてきているのにぎずかなかつた。

「ちょっと兄さん聞いてます?」

「ごめん、ごめんなんだつけ?」

「もう全然人の話きかないんですねから。」

「まあいいです。」

「今日は兄さんもてるんですか?」

「うんそうだよ。」

「そうですか、でも私負けませんよ」

「僕だつて負けない。」

「僕から体術とつたら何も残らないから体術だけは負けられないよ。」

「その生きです。じゃあ決勝で待つてます。」

そう言つて人ごみの中へ消えていった。

「よし僕も全力で行こう」

ここで武道大会の狙いを説明をしよう。

魔法使いは魔法を使うのが命その魔法が敵の魔法もしくは魔力切れで使えなくなつたら？

つまりそれは死を意味する。

それを防ぐために少しでも身体能力上げておけばいい。
だが個人で鍛錬するには限界がある。

そこで大会を開くことでお互に能力を高められるのでは？

そう考えられたのちにできたのが武道大会なのである。

この大会は結構前から開かれていて世界では結構知られていて毎年たくさん的人が見に来てお祭り状態になつていて。

大会には5～10歳限定で参加できる。

受付にいくと元気なオネーさんが話かけてきた。

「君かわいいねー大会に参加するのー？」

ぼくつてかわいいのか？という疑問が一瞬わいたけどそれをふりきつて

「参加します」

「おねーさん君みたいなかわいい子応援したくなるなー」

「負けないようになんばつてね。」

「名前と歳を教えて」

ぼくは名前を言いかけてけど自分の名前を聞いたこの人はどう思つだろう？

嫌われるか一瞬で態度を変えられるか、それのどつちかと思つた。

「どうしたのー？」

「名前がわからないの？」

「えっと・・・し、不知火遊璃です
「5歳です」

思い切って言つてみた。

でもおねーさんは、態度を変えるどころか興味津津だった。

「へえええ～君が噂の子か」

「なんだ、いい子じやない。顔もかわいいし」

「残念だなあ、君が@10歳年上ならおねーさん告白してたかも」
けらけら笑いながら「冗談を言つてきた。

パソコンをものすごい速さで打つて登録完了の紙とナンバーが手渡された。

「はい、登録終わり。」

「試合がんばってね。」

「バイバイ」

にっこり笑つて手を振つてきた。

僕も手を振つて選手控室に行つた。

1時間後開会式が終わつて遂にその時がやつてきた。
参加人数は30人その中で僕のナンバーは4番
運が悪いのか良いのかわからないけど2試合目だ。

1試合目白熱した試合展開になつたが犬飼共季と言う人が勝つた。
僕が見た感じそんなにも強いとは思えなかつた。

そして従業員の人に呼ばれて、僕はコロシアムの中心部分鬪痕の間に來た。

僕は周りの声援に緊張していた。そのせいで相手の名前も確認していなかつた。

左サイド不知火遊璃

右サイド犬飼慎吾

「…………」

僕はその名前を来た時冷たい汗が背中から落ちた。
あいつは僕をいつもいじめてくる慎吾だった。

「何驚いてんだよ」

「まさかお前と当たるとわな」

「一瞬で蹴りをつけてやるよ覚悟しろよおひ」ぼれ――――――

「試合開始！」

審判が試合の開始の合図をだした。

開始と同時に慎吾が突込んで来た。

攻撃はかなり重いと思う。僕なんかがくらつたら、本当に一撃で負けるかもしねない。

だけど動きにスピードがない。「こんなもの簡単に避けれる。

だが僕は避けずに前進した。

手刀で慎吾の拳の軌道をずらしてそのままの腕を地面に手をついてサマーソルトの要領で

回転すると同時に頸を蹴り上げて着地した。

「ぐああああ」

慎吾は上に高く上がつて受け身も取れずに地面に叩きつけられた。

慎吾はフラフラしながら立ち上がった。

だが目に焦点があつてない。

「くそお――」

「落ちこぼれがどこにいやがる。」

「でてきやがれ――！」

怒り狂ったように喚き散らしながら拳を無茶苦茶に振り回しているがはつきり言つて隙だらけだったので

後ろに回り込んで後頭部に手刀をあてて氣絶せると、審判が試合続行できるかどうかを確認しにいった。

気絶していることを確認すると試合終了のホールを鳴らした。

「試合終了――！」

「勝者、不知火遊璃」

「わああああああ」

歓声があがり僕はあんまり騒がしいのが嫌いなので控え室に速攻で戻った。

2、3、4、5試合と僕は、順調に勝ち上がった。

そして決勝戦予想通りつていうか当たり前ともいうべきかわからないけど相手は蘭だった。

午後2時決勝戦不知火蘭ＶＳ不知火遊璃

控え室でどう攻めるか脳内でいろいろ考えていたらいつの間にか時間が過ぎていた。

係員の人に呼ばれて、闘痕の間へと急いだ

「遅いですよ。兄さん」

「え、うん、ごめん」

「まあいいです。」

「勝負するからには全力で来てくださいね。」

「当り前だよ本気で行くよ」

「両者構えて」

「決勝戦不知火蘭ＶＳ不知火遊璃」

「試合開始」

試合開始の合図出た瞬間ぼくは動いた。

徹底的に鍛えた足の速さで蘭に向かって走り出した。

「うおおおおお」

咆哮にも似た声を上げながら真っ向勝負に出た。

蘭も真っ向から向かってきて拳を突き出してくるのが予測できた。

それを見て僕も真正面からぶつかってやる!と思いつつ、拳を突き出した。

そして、2秒後拳と拳がぶつかり合った。

その次に蹴りを放つたがしゃがんで避けられた。

パンチや蹴りなどで攻めたが簡単に避けられてしまつ。

「そんな蹴りやパンチ当たりませんよ。兄さん

「クツ・・ならこれはどうだ」

「ハアアアア」

「閃光脚」

思いっきり上に跳んで踵落としの要領で足をたたきつける技だ。

「これは、この技はまずいですね避けれない」

蘭は防御の姿勢をとつていた。

ガードをしているのも構わずその手にめがけて閃光の如く踵落としを叩き込んだ。

「ド「オ」ン」

ガードを吹きとばして完全に決まつた!と思つたけど当たる直前に腕を引いて威力を殺していったようだ。

普通に立ち上がつてくるがダメージがないわけないようだ。

手をぶんぶん振り回している。

「ふう 満れますねー」

「兄さんひどいですねこんなにか弱い女の子にひどいことをするなんて、」

「君は馬鹿なのか、」

「あの技、大男でも食らつたら氣絶するほどの技なのに威力を殺してるのはいえピンピンしてる奴のどじがかよわいんだよ。」

「本当に勘弁してくれよお」

「ふふ、いい一撃でした。」

「まあそろそろ反撃開始ですね。」

「やられたんだから私も魅せないといけませんね。」

「なつ」

警戒を解いていたわけではないけど一瞬で蘭が移動しガードをしましたけど、

「遅いですよ」

「ブウーン」

と唸りをあげた必殺の右ストレートが僕のお腹に吸い込まれていった。

「があああああ」

殴られた後思いつきり後ろに吹き飛ばされた。

みぞうちを殴られたのかどうかわからないけど気分が悪くなつた。

吐きそうだったけど我慢して素早く立ち上がつたがすでに蘭は距離を詰めてきていた。

「はあああああ」

「灯彗連脚」

強烈な蹴りの連続コンボが繰り出された。

僕はとつさにガードしたがさつきの攻撃のダメージが残つてるのでうまく腕を使えなかつた。

4回目の回し蹴りで腕を吹き飛ばされた。

そして5回目の蹴りが顔面に入りましたしても吹き飛ばされた。

「はあはあ

「これで終わりです。」

蘭はこれで勝つたと思つたのか審判に勝利宣言を囁つよつと促した。

「はあはあ

「まだぼくは、ぼくは、まだやれる」

足がガクガク震えて立つてゐるのもやつとの状態だけど氣合いで立ち上がつた。

「これで本当に終わりです」

容赦ない蹴りが僕の腹にクリンヒットして僕はボールのよつに転がつて行つた。

だけどまた立ち上がり蘭に向かつて歩いて行つた。

「どうした？蘭僕はまだ戦えるぞ？さつさと来い」

右へ左へフラフラ歩きながら蘭に向かっていった。

「どうしてですか兄さん？もういいじゃないですか。

「実力の差なんてはつきりしてるじゃないですか。」

「どうしてこんな無茶苦茶なことするんですか。」

「そろそろあきらめて負けを認めてくださいよ。」

「バカぬかせ」

「そうおもうなら君が棄権してくれそれで全てが解決する」

「する訳ないでしょ」

「そう言われると思ったよ」

「だけど、僕はいつもみんなに迷惑かけてるからこの大会だけは負けられないんだよ。」

「どんなことがあってもね」

「体術だけは負けたくない。」

「絶対に」

「だからぼくは、負けな・・・」

「バタン」

「え、」

「ちょっと兄さん、、兄さ―――ん」

「大丈夫ですか兄さん？大丈夫ですか？」

そう言いたかつたけどさすがに限界みたいだった。セリフを言う前に僕は意識を闇の中にそばなした。蘭が心配してくれるみたいだけど、もう何を言つてるのかわからなかつた。

そして大会は悔しいことに決勝戦敗退という結果に終わってしまった。

このあと不知火家で事件が起ころその事件のせいで僕は・・・・・・

従妹の登場 & 武道大会（後書き）

感想とか書いてあつたらかなりテンション上がりります。
誤字脱字報告 yy

誤字脱字あつたら報告よろしくーー！

感想書いてくれた方ほんと感謝します。

書いてくれるだけでガチでテンションとモチベーション上がるんで。

これからも書いてくれるとうれしいです。

じゃあ5話始まり始まりーーー

この世界には各領土に1匹のランクの魔物を代々封印し続いている。

その封印を解けるのは、各領土の直系の一族の血だけが封印を解くことができる。他の者が封印を解こうとする者たちは、焼かれあら者は空から雷があちてきて灰になり、ある者は土の中にひずりこまれて行つた。

その魔物はとてもなく危険でもしこの世に出でくるようなことがあれば甚大な被害が出ると言われている。

決勝戦不甲斐なく負けてしまった僕はまだ修行が足りないことを痛感したのでよりいつそう修行に励むことにした。

今日は不知火領の中の森林地帯フレイルの森通称「迷よいの森」で修行することにしていた。

ここは名前の通り一旦入るとなかなか出らないし、野生の動物もいるので走り込みも兼ねて狩りをしながら林道を走つて行くことにした。この森の最奥地は立ち入り禁止となつていてる場所がある。なぜなのかは知らないが奥へ奥へ行く度あに空気が変わる重くなると言うか、息苦しくなると言えばいいのかなんか神聖な場所のような気がする。

「まあ僕には関係ないけどね」

そう独り言を言つてぼくは走りこみを始めた。

1時間走つては休憩してちょっととちょっと休んだらまた走るという修行をしていたらいつの間にか1時になつていた。

20分ほど獲物を探していたらかなり大物の野猪がいた。

「へえ～大きいなよし今日のご飯はあいつにしよう

そう思いちょっと疲れた足を踏み出し徹底的に鍛え上げた足の速さで奇襲した。

（20分後）

手こずつたけど無事倒したのでマッチと枯れ葉を用意して火をつけ、そのまま猪を丸焼きで食べた。

そのあとちょっと休んで1時間ぐらい走りこみをして3時ぐらいになつたので、帰ろうとしたら思わぬ人物に遭遇した。

「ん？ あれは慎吾だ。」

丸刈りの頭をしたちょっと背の高いシリエットが見えたので一瞬で分かつた。

「あいつ何してるんだろう、確かあつちは、立ち入り禁止じゃあ「少しつけてみようかな」

実際少し迷つたけど好奇心が勝つたため慎吾をつけることにした。だけどぼくはそんなに気配を殺すのがうまくない。

まあ慎吾だったら大丈夫だろう。

しかも明らかに様子は挙動不審だった。

僕はつける価値があると思つた。

奥に進むと緑の光がやらやら光つていた。

「あれは」

「トレース」

トレースとは相手を追尾する時や目印を付けたい時に使う魔法だ。でもおかしな、僕の記憶ではトレースは風の魔法だった気がするんだけど、

慎吾や他の子供たちがアビリティーを覚醒させているわけがないし

「うーんどうしてだのう？」

他の大人の仕業か？

まあつけていつたらわかるだろう。

そんなことを考えて、うーうー5分くらい経つたのだが、慎吾は森を的確にぐんぐん進んでいく。

当然奥に行くと、どんどん息苦しくなつてくる。

そして、遂に慎吾は最奥地まで来て立ち止った。そこは森の一角にあるにもかかわらず、金網で厳重に守られている場所。

「もしかしてあいつ最奥地に入るつもじじやあ」「でも何の用があるんだろう。」

「まず僕はあの奥に何があるか知らないし。」

うーんと唸つていたら奥から誰か出てきた。

「ガシヤ」

「これはバロン様」

慎吾がバロン様といったのはかなり身長は低いが体がぷっくりとふくれていて、耳はとんがつており目にはモノクル、靴はピエロが履いているような先のとんがつた靴を履いている。

服装は、上下黄色のジャージ手には黄色の手袋その手の中にはカエルの形をした時計を持つているかなり不思議な格好をしている老人だった。

「こんにちは、慎吾くーん」

「ここにくるまでだれにもきずかれていませんね。」

「はい」

「そうですか~」

「あの、」

「なんですか~」

「あの約束ちゃんと果たしてもうえるんですよね

「わかつてますよ~」

「私を信じられないんですか~?」

「いえ、そんなわけでは」

耳を澄ましてきつきつと聞くやう取り。

「うーん」

「どうしたんですか？」

「あなたへマをしましたね。」

「へ？ 何のことか」

「じゃあなぜあそここの木の向こうにひとりがいるんですか？」

「えつ」

「ばれた」

「なかなか氣を殺すのがつまいですが、わたしからは逃れられませんよ？」

「そう言つてバロンの眼光が光つた。

「くつ」

その時点でぼくは逃走をはかった。

あんな体で速く走るなんて無理だらうそう踏んでいた。

しかし、バロンの手には緑色と青色が混ざつた魔法陣がすでに展開されていた。

「クロウディ

そういうながら、奇妙な老人バロンは足元に白じまるで雲のようなものがあつた。

しかも、老人はのんきに正座で座り、「行け」とだけ命じた。

「なつ地面を正座しながら滑つてる？」

「そんなんばかなそんな魔法があるなんて。」

「しかも詠唱破棄だつて？」

「くそ」

「ぼくじやあ相手が悪すぎる」

「しかも速い！追いつかれる。」

「ほほほほほ」

「誰かは知りませんが逃がしませんよ」

「くそお」

ぼくはいきなり曲がつたが、むこうも滑らかに曲がつてきた。

「しょうがない」

「あれを使うしかないか」

「ごそごそと走りながらポーチを探つていたら接近して来ている事にきずかず捕られてしまった。

「誰かは知りませんが知られた以上は黙つて返すわけにはいきません。」

「あなたには悪いですが死んでもらいます。」「殺されてたまるもんか。」

そう思いすでに出していた結晶を地面に叩きつけた。

「ヒヨ？ これは転生石なぜこんなガキがああ」

「じゃあねおじさん」

「待てえ」

「そんな声が聞こえたが聞こえなかつたことにした。」「

「ハアハア」

「危なかつた。」「

「セバステルが昔誕生日にくれた転生石があつてよかつた。」「

「ていうか、あの人何者なのかな？」

「格好はふざけてるけど詠唱破棄が使えるなんて」「

詠唱は魔法を発動するために必要なもの。

詠唱の仕方は4つある1つは最も簡単な方法は全詠唱。

この詠唱は名の通り魔法を発動するには全ての言葉を紡がなければならぬ。

2つ目は簡易詠唱

この詠唱は少ししか言葉を紡ぐ必要がない代わりに、何か代用品にあらかじめ魔力を入れておいてその代用品を使うことで発動することができる。

この詠唱の難しいところは、それぞれ個人の波長が合つもの、武器や紙、本、日常で使うもの種類は豊富でその代用品はこの世界では「ルーツ」とよばれている。

3つ目は共同詠唱

名の通り複数の人で詠唱し、より強力な魔法を撃てる詠唱である。この詠唱はお互いの息がぴったり合いなおかつお互いの事を信頼し

あう事が大事だと言われている。

なので人数が増えるたび、威力が上がるが、発動も困難だと言われている。

4つ目は無詠唱または詠唱破棄

これは最も難しいと言われている。とくに突然無詠唱ができたりする。

アビリティーと一緒に何かきつかけがあれば、無詠唱ができるようになるという事が帝国魔術研究者から

実証されている。

しかし、どんなきつかけができるかはわからないけど、いくつか条件がある。

一つアビリティーが発言している。

一つ簡易詠唱を使うことができる。

一つ上級魔法が使うことができる。

一つ死にかけたことがある。

今はそれだけくらいしか実証されてないらしい。

それだけの難しい条件があるのに使えるなんてそういう強い。

おそらくお父様と同等それ以上かもしれない。

とりあえずお父様に報告しなくちゃ。

急いで不知火家の当主の家つまりぼくの家に急いで行つた。

家に行く途中、面会取り締まり役の犬飼新陽さんに出会つた。

「あ、新陽さん、お父様に報告しなくちゃいけないことがあるんだけど」

「ツチ

「重英様は今用事でここにはいない。」

「帰つた。帰つた。」

「そう、わかつたよ。」

「じゃあそういうことで。」

「あいつを重英に面会させる訳にはいかないからな。」

「ま、どうせどうでもいいことだろ。」

「おまえはもうすぐ死ぬんだからあの方によつてな。」

「ふはははははは」

「おれたち犬飼家が世界最強の火の魔法使いになるのはあと少しだ。
あと少しで絶対的な力が手に入る」

「あの方のおかげでな。」

「お楽しみのようですね。新陽さん」

次元が割れたと思ったら変な格好をした老人が現れた。

「こんばんわ！バロン様」

そうバロン フィア スレイド様

それがわが主の名前

「あの子が直系のガキですね。」

「そうです。」

でわ、はじめますよ。

明日の夜計画実行です。

「準備はできていますか？」

「はい」

「ほほほほほほ」

「でわ、私も用意してきます。」

僕はこの時予想もしていなかつた。
自分の存在がどれだけ重要だつたことか。

動画出力・歴史（前書き）

どうも。紫苑です。

6話目です。次で少年編終わりの予定です。

7話目から青年編です！！

誤字脱字報告宜しく！！！

でわ6話始まります。

動き出す歯車

新陽さんにお父様がいないことを聞いた僕は、いそいでセバステルの部屋へ急いだ。

セバステルの部屋のドアを勢いよく開けて

「セバステルいるー？」と聞いたけど、いつもそこにはいる老人はそこにはいなかつた。

「おかしいなあ、仕事してるのかな？」まあ考へても仕方ない。とりあえずメイドにでも聞こうかな。

適当にそこらへんで働いてるメイドに聞いたけど、知らないの一点張りだつた。

ここで余談だけど、最近メイドや執事が白い目で見てくる事や陰で悪口を言つことはほとんどなかつた。

なぜ？って言われると武道大会で準優勝したからだ。実は蘭お嬢様と互角に戦つた遊離坊ちゃんまつです！「じんじやね？みたいなノリらしい。

こんなことで態度が変わる大人つてつくづく汚いなつて思つた瞬間だつた。

そして、準優勝したせいで、身内の間の風あたりがひびくなつた。散歩していただけで、炎弾や炎の槍が飛んできたり、生傷が絶えなかつた。

まあ僕も一樣不知火家の血が流れているのか、炎の加護があるので、炎に当たつても熱いと思うだけだつた。でも、熱いといつても身がさけるような熱さだ。

だから10回くらいあたつたら気絶する。

そして、気絶する前にこう聞こえる。

「今日は俺があいつを殺したぜ。」

「はははははは」って声が・・

たまにはリンクまでされたことがある。子供たちは、安いプライド

を振りかざして、こう言つたさ

「あの時は、魔法が使えなかつたから負けたんだからな。調子に乗るなよ。」

「落ちこぼれ」ってね。

それなら10人で僕一人を囮んでないでサシで来て欲しいよね。一人で何もできない癖に。そう思いながら、僕はリンチを受ける。

抵抗はしない。

抵抗をしなかつたら、相手はすぐ飽きるから。何回か魔法を放たれて、蹴られ、殴られしたら僕は、

動かなくなる。蹴られても殴られても氣絶した振りをする。

そして、いじめつ子達が去つてから僕は立ち上がりフラフラしながら、迷いの森に行つて傷を回復させる。

もしくはごくたまに、蘭が助けたりしてくれる。

僕はその時、心底感謝した。

そして、蘭は圧倒的に強かつた。

10人相手でも全く臆することなくいじめつ子達を倒していく。何回か繰り返していく内に敵わないと踏んだのだろう。

蘭が来たら蜘蛛の子を散らすように逃げて行つた。

僕はありがとうと言つて頭をナデナデしてあげる。

蘭はくすぐつたそうにして、「えへへ、兄さんのためですもん。」

そう言つて微笑みかけてくれた。

その顔は天使のようにかわいく僕が初恋した事は言つまでもない。まあ長い愚痴みたいになちやつたけど、話を戻して、10人目のメイドに聞いたところ昼ごろに、買い物にいつたきり戻つてないらしい。

「あれ??

ますますおかしい、昼ごろに行つたなら普通ならもう帰つてきてるはずだ。

さつき話していたメイドが「飯の時間だから早く食堂に行つてください。と言われたので仕方なく「飯を

食べに行つた。

「ご飯を食べたらセバステルに電話してみよつと黙つて食堂に行つた。食堂に着くと蘭が先に来て、ご飯を食べていた。

「あ、兄さんこんばんわ。」

「こんばんわ蘭」

「どうしたんですか？兄さん変な顔して。」

「ちょっとね、昼間信じられないことが起つたんだよ。」

「どんなことですか？」

「えつと、笑わないでね？」

「笑いませんよ約束します。」

「えつとね、変な格好したオジサンが詠唱破棄して、見たこともない魔法を使って僕を襲つて来たんだ。」

「どんな魔法ですか？」

「雲を作つてビゴーンつて地面を滑る魔法」

そつ言つて手で滑るのをジエスチャーした所で蘭は耐えきれなくなつたのか笑いだした。

「ふつふつふははああはあはは」

「そんな魔法ある訳ないじやないですか？」

「兄さん夢見てたんじやないですか？」

「ほんとだつて！！」

出てきたご飯を頬張つた。

「そんなことより明日何の日かわかつてます？」

「そんなことつて君は、」

実際見てないからわからぬだけだと言おつとしたけど、これ以上言つても意味がなさそつだつたのであきらめることにした。

「ハーアーもういいよ。」

「で、明日つて何の日？」

「え、本氣で言つてるんですか？」

「明日つてなんか重要なことつてあつたけ？」

なんだろう？なんか修行のイベントかな？

それとも、他の事があるのかな？

「兄さん本当にわからないんですか？」

「ごめん、ぼく忘れっぽいから。」

「ハア―― しつかりしてくださいよ。」

「明日兄さんの誕生日じゃないですか。」

「そりだっけ？まあ僕如きにお金つかつてくれるわけがないんだけどね。」

「あ、そのごめんなさい。」

「いやな思いしましたよね。」

「いや、いいんだよ。」

「僕が魔法も使えない欠陥品だから。」

「そんなことありません。」

「バン！――と机を勢いよく叩いてこう言つてくれた。」

「私は兄さんのことを尊敬しています。」

「だつて、兄さんはだれよりも修行を頑張つてます。」

「朝も昼も夜も遊びもしないで、ずっと修行していることは知つてます。」

「最近は、寝る間も惜しんで魔法を覚えたり、トレーニングをしてるの知つてるんですからね。」

「だから、魔法が使えなくつたつていいじゃないですか。」

「私は、私は他の人から何と言われようと、精一杯生きてる兄さんが格好いいと思いますし、」

「誰よりも尊敬しています。だから欠陥品なんて言わないでください。」

泣きながら蘭はそう言つてくれた。

僕は泣いていた。

泣く気なんかなかつたけど勝手に涙が溢れてきた。

ぼくは、蘭に抱きついて

「もういいよ。君が言いたいことはわかつたから。」

「こんな兄だけど、尊敬してくれてありがとつ蘭」

「だから、泣かないで。」

そう言つて頭をナデナデしてやるとぐすぐつたそこにして、
数分ナデナデしていたら落ち着いたのか、ちょっと怒つたよつた声
で、

「わかりました。」

「だから、そろそろ放してもうえませんか？」

「はずかしいです。」

「あ、ごめん」

「まつたく兄さんつたら調子に乗りすぎです。」

「「めんつて」

「まつよくに許しを懇願してみた。」

「もう仕方ないです。今回だけですよ。」

「そういつて笑つていた。」

僕もつられて一緒に笑つていた。

まったく蘭には敵わないな。純粹にそう思つた。

珍事件？のあと蘭は用事があるらしく食堂を後にした。

「僕もセバステル電話しなきゃ…」

メイドに電話を貸してもらつて、セバステルに電話したけど、繋がらなかつた。

こうなつたらいよいよおかしくなつた。

お父様に連絡しようとしたけど、田の前がぐるぐる回つて体に力が入らなくなつて、

意識がどこかにいきそつになつた。

フラフラしている僕をメイドは一様仕事のためかやさしく接してくれた。

「坊っちゃん大丈夫ですか？」

「ちょっと最近無理しそぎたかな。」

「まあちょっとだけ休もう。」

「そう5分だけ・・・」

そう思つて僕は冷たい床に倒れこんだ。

遊離が倒れてから日が変わつて毎13時

頭に冷たい物が触れてきた。
頭に濡れたタオルがあつた。

田を開けてみると、見たことのある風景、それが自分の部屋だ。

そこにはお父様がいた。

そうかと言つて、心配そうにこちらを見ていた。

一
遊離

「なんですか？」

修行をするなどは言わん」「だが、倒れて誰かに迷惑をかけるなど言語道断だ。

「はーーーすみませんでした。」

「だが、子供は無茶するものだ。」

「そういう、バカ者は少なくとも嫌いじゃないぞ。」

「しかし、お父様にもまた迷惑を

「ハガ著子供が新の苦労なんてものを見ぬなくていいんだ」「お前はまだ弱い、せめて強くなつてからそつとつ事言つよ」

「はい。ありがとうございます。」

「眞にあるな」

お父様は手を振つて退室した。

「頭痛いな」

ガンガンする頭を押さえながら僕は飲み物を取りにいこうとした。
けどその思考は一瞬で消えた。

地面から何かが出てきていたのだ。

最初はRPGに出てきそうな黄色いスライムのような形から人型になり昨日見た老人バロンが不敵な笑みを浮かべて立つていた。

僕は、緊急事態に頭が真っ白になつた。

とりあえず質問した。

「な、なんのようだ。どうやつて入つてきた。」

「ホホホホホ昨日ぶりですね。」

「不知火遊璃君」

質問に答えろ！…どうやつてここまで来た？

「そうですね、まあ質問の答えは私の上級アビリティー貫通のおかげです」

「アビリティーを使って二ヨキ二ヨキ生えてきました。」

不敵な笑みを浮かべながらバロンは時計を弄りながら答えた。
「、こいつ上級まで持つてるのか、どうする。
こいつには逆立ちしても勝てない。

どうする？

どうするか考えていたら、あの「テヅさで信じられないスピードで拳が飛んできた。

だけどこれくらいならついていける。

そう思い体を動かそうとしたら・・・

おもいつきりパンチを食らってしまった。

「やがての世、避けられたと思つたでしな?」

「そうですね。森で会った時でしたら、避けられたのかもしれません
が、それだけ体に付加がかかっているということですね。」

ハロハのハンチはとてこせなく重かた
もねお腰の用の難病があつてばかり。

中は自分の目の焦点があつてなかつた
朦朧とした意識でみたのは容赦なく溝内にパンチを入れるバロンの

直後吐き気と暗闇への誘いが同時に襲ってきて僕は、意識を飛ばされた。

バロン Side

少年を氣絶さして私は少年にある術を掛けた

「レールの森」最深部の封印の森に来た。

そこには、20人ほどの人達一犬飼家の人々がいた。
一人の男が寄ってきて片膝をついて私に敬礼した。

バロン様準備が整いました。

「はい。買い物の帰り道に襲撃しました。」

一九四二年

「魔法陣は？」

「完成しております。」

「ふむ。準備万端ですね」「わはじめましょうか。」

「宴をね

そうして、夜7時前代未聞の事件がまたここで不知火家で起ころる

「ほほほほおほほほ

月明かりに揺れた老人の声が森に響いた。

動かす歯車（後書き）

初級 中級 上級とアビリティーはあります。
まあのちのち説明するはすです。
@アドバイスとかあつたらありがたいや～です。
でわさいなら！！

絶体絶命（前書き）

こんばんは 紫苑です。更新とても遅くなりました。
今回はかなりがんばつて書きました。

最近どこの大学行こうか迷つてる所です。

そう言つてまた、更新遅くなるかもしません。

そして、ラザリスをルーツという名前に変更しました。
友達にこの名前ないわーっていわれました。（泣き）

ルーツ 簡易魔法術を発動させる媒体

人の波長によつて物が変わる。

武器に適合する波長をいくつも持つてる人もいるが、大抵は1個か
2個

ルーツ＝その者のメインウェポン

みなさん思つてるかも知れませんが、この小説主人公最強要素がどこにもありません。

いつ主人公が最強になるかというと、@ちよつとです。

次の話で最強になる予定でしたが、あんまりしつくりこなかつたので、もうちょっとと書く事にしました。

次で青年期行くとか言つて調子こいてすいませんでした。

深く反省します。

まあいろいろあると思いますが、宜しくお願ひします。

「バチン。」

「オラ、起きろ お目覚めの時間だ。」

頬に痛みが走り僕は意識が覚醒させられた。

そういえば、バロンに捕まえられたんだっけ？

とりあえず、冷静に状況判断しよう。

僕がいるのは、森の中で目の前には祠があつてなぜか、何もない場所で、炎が祠の中で輝くように燃えていた。

そして僕を中心に見たこともないような大きな魔法陣が書かれていた。

かという僕は縛られていて身動きひとつとれなかつた。

そして、おそらくここには、迷いの森だ。

そして、田の前にいるのは、新陽さんだ。

「あなたは新陽さん、なぜこんなところにここには、迷いの森ですね？」

「じ名答だ。坊ちやま」

「さすが、五大貴族の時期頭首、この状況で、冷静さを欠かさないなんてさすがだ。」

「僕なんかにもつたいたいない言葉ですね。」

「どうして、迷いの森なんかに、仕事はいいんですか？」

僕は皮肉を言った。

「くくく、この状況で仕事の話なんて。」

「まったく、恐れもしないのか？」

「怖すぎてトイレに行きたいくらいだよ。」

「だから、トイレにいかしてもらえない？」

「くくく、冗談を言うな。」

「縄を解いたら逃げ出すだろ？」

そんな話をしていると、丸いシルエットが出てきた。

そいつは、僕をここに連れてきた、張本人だった。

「おはよーございます。不知火家時期頭首不知火遊離君
その老人は新しくゲームを買ってもらつた、子供のような目で僕を見つめた。

「おはよう。バロンこの縄きついから、さつさと解いてくれない?」「いやですよ。」

「そういえばまだ、自己紹介してませんでしたね。」

「お初にかかります。」

「私の名前はバロン・フィア・スレイドと申します。」

「ギルド ブラディー・アルケミストのマスターを勤めています。」

「以後よろしくお願ひします。」

「そういうシルクハットを取つてお辞儀をした。

「きょうここに来てもらいましたのは、ある実験をしようと思いまして。」

「実験?」

「ええ、新陽さん例の物を」

「わかりました。」

「大吾、正吾、慎吾セバステルを連れてこい。」

「OK父さん。」

「な、セバステルだつて?」

「お前達がセバステルを?」

「するとバロンが不気味な笑い声とともに回答をくれた。

「私が襲うように命令しました。」

「なぜだ、僕やセバステルを人質にしたつて何の価値にもならないぞ。」

「いいえ、あなたとても価値があります。」

「なんせ、あなたがいないと私の計画は成功しませんからね。」

「計画つて何？」

「おやおや、まさか知らないのですか？」

「（）」、フレイルの森の再奥地世間一般では、クリーチャーランクの魔物を封印している場所を禁足地と言います。」

「まさか知らなかつたんですか？」

「知らないよ。」

「お父様に聞いても何も教えてくれなかつたんだ。」

「くくくあはつはは」

「これは傑作ですね。」

「なるほど、そういうことでしたか。」

「結局なんなの？」

「まあその話はセバステルが来てから話しましょう。」

あれから5分くらいたつたかひどい怪我を負つたセバステルが連れこられた。

「セバステル大丈夫？」

「ううう、坊ちゃん、すみません。」

「つるさいですよ。」

「蠅が口をきくな」

「ドカ。」

そう言つてバロンはセバステルを蹴りあげた。

「ぐがああ」

「セバステルに乱暴は止めて！！」

僕はめいいっぱいの声で叫んだ。

「さて、話の続きです。」

「あなたの目の前にある祠これにはSS級クラスの魔物が封印されています。」

「な、なんだつて、信じられない。」

「ホントですよ。」

「「」にはS.Sランク魔物炎蛇フレイムデュウスが封印されています。」

「」のクリーチャーは1000年前に当時の不知火家初代不知火乱英によつて封印されました。」

「フレイムデュウスは、体長45mの大蛇です。」

「その蛇に睨まれると体から紫の炎に体が包まれ跡形もなく消えてしまい、その蛇が通つた場所は

マグマができ体には紫の炎を纏い如何なる魔法攻撃も跳ね返す鱗を持つていると言われています。」

「さて、問題です。あなたのお父様はなぜこの事を教えなかつたでしょう？」

僕には答えなんて出すことができなかつた。

そもそもこの場所がある事、事態知らない。

「ふふ――時間切れ――」

目の前の老人は大変残念そうな顔をした。

「残念。」

「正解はこの封印は不知火家直系の者だけが封印を解くことができ、そして、封印を解いたものだけがその蛇を自由自在に操ることができるからです。」

「でもなんですか？」

「うーん、おそらくですが。」

「あなた、魔法をなぜか使えませんよね？」

「そうだよ。」

「それはたぶんあなたが生贊用だつたからです。」

「生贊用？」

「この封印がやつかいなところは100年に一度生贊として直系の者が命を投げ出さなければならない」

「つまり、その時期が今年と言つ訳です。」

「そして、ある術を掛けるんです。」

「その術が何なのかは、知りませんがたぶんその術の副作用でしょ

う。

「そここのセバステルはたぶんあなたが、あまりにもの苦痛で自殺しないように心のケアでもする係でしちつ」

「魔法を使えないというのは酷すぎますからねー。」

「だから、重英は教えなかつたんじゃないですか？」

「この事を知つたら復讐されるとでも思つたのですかね？もうひとり蘭でしたつけ？」

「あの子にはあなたに好意を寄せているはずです。何も知らない彼女を連れ込んで適当に何か理由を

つけて封印を解いてもらえばいいですかね。」

「お前の憶測なんて誰が信じるか！！」

「憶測じゃないですよ。」

「証拠もあるのか？」

「証拠？ありますよ」

そつ言つてバロンはポケットから青色の液体が入つた薬を出してきた。

「それ、何？」
「これは吐かせ薬」
「この薬を飲んだ者は相手の如何なる質問でも、答えてしまつ。」「それで何を？」
「そんな事は決まつてます。」「さつき私が予想した事を確かめようと思つているんです。」「そんな事しても無駄だよ。」「セバステルが僕を裏切る訳がない。」「くくく、それはどうですかね？」
「まあ、とりあえず飲ましてみましょ。」「バロンはセバステルのもとに行つて、青色の液体を口に流し込んだ。

そして僕の目の前に連れてくると、質問し始めた。

「では、セバステル質問です。」

「はい。」

「あなたはなぜ、意味嫌われている遊璃君に対して世話を焼いたのですか？」

「はい。旦那様に命じられて遊璃様の世話をしました。」

「どのような命令を受けたのですか？」

「はい。」

「封印用の生贊だからその時がくるまで世話をじてみると。」

「……」

「うそ、嘘だよねセバステル？」

「セバステル、その話は本当なのですか？」

「はい。@10年後に封印の効果が弱まります。」

「なので、9年後、8月20日に極秘に儀式が行われる予定でした。」

「それまで、遊璃様のお世話を早まつて自殺などしないように監視していました。」

「そんな……」

「では、最後の質問です。」

「あなたは、こんな仕事を自ら進んでやつたのですか？」

「バロンが質問した時、セバステルの旦が無機質な物から怒りの物へと変わった。」

「そう思うか？」「？」

「旦那様に命じられたとはいえ、こんなガキのおもりなんてしたい訳がないだろ？」「」

「誰かにいじめられてピーピー泣きやがって、慰めるなんてめんどくさい。」

「だいたいおかしいとは思わなかつたのか？」

「ワシだけお前に優しく接していた事に。」

「じゃあ、今まで優しくしてくれたのも全部演技だった訳？」「」

「当たり前だ。」

僕は全ての物に裏切られて気分だつた。
最も信頼していた相手に裏切られてしまつた。
もうどうでもよくなつてしまつた。

自分の事もこの状況も。

全てが嫌になつてしまつた。

バロンは、恍惚とした雰囲気でこちらをみつめていた。

「素晴らしい、素晴らしいすぎる。」

「人間が絶望する時はなんてい表情カオをするんでしょうか。」

「もつとその表情を観賞しておきたかったのですが時間がありません。」

「さて、最後のゲストに登場してもらいましょう。」

「？」

「蘭さんですよ。」

「今は氣絶しますけど。」

「おい！！蘭は、蘭は関係ないぞ！！」

「まあまあ、そう興奮しないでください。」

「蘭さんには、手出しさしません。」

「なんども言つけど、お前の言つことなんて用できるか。」

「まあ、信じるか信じないかなんて、あなたの勝手ですけど。」

「さて、そろそろはじめますよ。」

「では、新陽さん、蘭さんを使って封印を解いてください。」

「あの、バロン様、フレイムデュウスは私が頂けるのですよね。」

「ええ、私はただ世の中が混乱していくのが見たいだけですから。」

「それだけが私の生きがいですから。」

「ありがとうございます。」

「では、解除します。」

そう言って、蘭の手を引いた新陽さんは詠唱し始めた。

「我モトム、太古ナル意志ヨ、我ノ声一答エヨ、永劫ナル封印、破壊スル者ナリ我ニ力ヲ、我ニ栄光ト名誉ヲモタラセ。」

「いでよ、紫炎の邪神フレイムデュウス。」

詠唱が終わると同時に蘭の手の平をナイフを斬り血を噴出させた。そして、その手を炎の中に入れ込んだ。

「おい、蘭に何してんだああ――！」

「ふふふ、さあ出できますよ。紫炎の邪神がね。」

バロンがそうつぶやいた瞬間、地震が起きた。

これが漫画ならば、ゴゴゴゴゴゴゴゴ的な効果音がつきそうだ。実際笑いごとじやない。

はつきり言つて立つことなんて不可能だ。

僕の横で新陽さんが狂つたように笑っていた。

「ヒヤヒヤヒヤヒヤ！！！」

「遂に我が一族の野望が叶う」

「野望つて何？」

「教えてやるよ。不知火家が納めているこの領土、JAPANは、不知火家を尊敬して自ら傘下に入った一族が大半だが、俺たちは違う。」

「俺達の先祖こそがJAPANをより良い場所にできると思つていた。」

「だから、俺たちの先祖、不知火家に全面戦争を仕掛けた。」

「俺たちの戦力は向こうの8分の1程度だった。」

「結果は無様だつた。」

「戦争が始まつてたつた2年で先祖たちは敗れて行つた。」

「俺たちはつぶされたんだよ」

「不知火の圧倒的な力に。」

「それからは200年ほど、俺たちは道具のように扱われた。」

「そして、我ら一族のJAPAN内での地位は地の底に落ちた。」

「毎日毎日任務に出て、魔物に殺されるか、任務の出すぎで過労死するかのどつちがだつた。」

「たつた20年で5000万人の同志が憎き不知火に殺された。」

「それでも、それでもだ、私たち一族は不知火に媚を売つた。」

「いつか復讐するためにな！！」

「この屈辱がわかるか？」

「それは・・・」

「だが、こんな屈辱味わうくらいなら死んだ方がましだと最近思いだした。」

「だから俺は、自殺しようと思つた。」

「そんな時、現れたのが、バロン様だ。」

「バロン様が、この計画を我々に授けてくれたのだ。」

「そして今、我ら一族の祈願が叶うところだ。」

「さあ、いでのフレイムデュウス」

新陽さんが叫んだ瞬間森が割れ、地面から大きな紫色の炎を纏つた蛇が現れた。

新陽さんの一族の人達がフレイムデュウスを見て歓声をあげている。チラホラとやつたぞ！！とか不知火に天罰をなんて言葉が聞こえる。

「さあフレイムデュウス不知火家に天罰を与えろ。」

そう、新陽さんが命じた瞬間、フレイムデュウスが一族の人達に向けて紫の炎弾を吐いた。

一族の人達は紫炎の炎に包まれてしまった。

その中には断末魔の叫びをあげるものや、泣きながら熱い熱いと言つて、灰になつて行く人もいた。

「貴、貴様何をしている、誰が我が一族を狙えなどと言つた。」

新陽さんが、そう言った瞬間、フレイムテュウスがこっちを振り返り

「ああん？」って言つた。

ぼくは空耳が聞こえたのかと思った。

たたのサトのぐせに俺様にめいれいしてんじやねえ

一
し
ま
し
た
ベ
ン
ト
!

僕は驚きのあまり勢いよくツッコンでしまつた

「、うるせー あんまりつるせーと殺すぞ?」

「うはあああああーー1000年ぶりのシャバの味だぜ」

「バロン様、これははどういふことですか？」

「なぜ、私の命令を聞かないんですか？」

「ククク、あなたもバカですね」

「封印を解いたのはあなたでわなく蘭さんでしょ？」

「だから、今のフレイム、リュウスの所有權は、蘭さんにあります。」

「でも、蘭ちゃん、今嵐絶してます。」

だから、『元は血田』語の命令も聞かないと、うまいこと

「量義、歸つては

貴様 驚いたな！！

おや、人聞きの悪い、あの時の約束は守られますよ。

不知火家を潰してくれという、約束はね

「なんたつて、今からこのJAPANは、フレイムデュウスに滅茶

苦茶にされるんですから。」

「あの化け物が封印されて早1000年相当恨みが溜まつてゐるは
どうやら

ふと、気づくと、フレイムテュウスがかなり近くまでやって来ていた。

た。

「ぐはははははは、この小娘の契約は破棄させてもらつた。」

「そんな」とやでやんですか。

「やはり、SSラジンクのクリーチャーは興味深い。」

卷之三

バロンがかなり興味を示していると、新陽さんが、

「フレイムデュウス！！貴様は俺が殺してやる。」

そう言って、新陽さんは剣をいつの間にか、出して剣を上に掲げ詠唱し始めた。

「炎の槍達をかの者を撃ち貫け。」

「バーンズラーンス」

詠唱し終えた後、炎を宿した槍が20本ほど出てきて、フレイムデュウスに襲いかかった。

この術は、使用術者のマナ総量が高いほど槍の数が増え威力も上がる、中級魔法術だ。

剣を媒体として、簡易詠唱し、威力もスピードも申し分ない。敵だけど、技術面では、かなり尊敬できる。

だが、

「ほおなかなか早い詠唱だな。」

「威力もなかなかあるが、残念ながら、俺の鱗は、魔法を通さない」

「そんなことは、わかっている。」

「さあ、爆ぜろ」

「何？」

新陽さんが手で、

空気にクロスを書いた瞬間、爆発した。

「すごい！！」

僕は素直にそう思った。

「あの槍には、起爆石が仕込んであつたんだ！－」

起爆石は炎の精霊が石に宿り、衝撃をあたえることで爆発を起こす石だ。

普段は相手に向けて投げるのがセオリーだけど、まさかこんな使い方をするなんて。

「どうだ？」

「不知火を倒すための、とつておきだつたんだが、最高純度の起爆石だ」

確かにすごい威力だつた。だけど、そのぐらいで本当に倒せられたのか？不思議にそう思った。

案の定

「ぐはははははははは。」
「それぐらいで、勝つたつもりか？」
「たかだか、中級魔法術と火打石如きで？」
「昔と比べると落ちたものだな。」
「昔の不知火はもつと良い傘下をもつていたぞ？」
「な、我が一族を侮辱する気か？」
「せめて、上級魔法術でも、使ってこい。」
「くそお、ぶつ殺してやる。」
「遅い。」

フレイムテュウスは、その巨体からは、想像できないほどスピードで、新陽さんがいた所を通つた。

僕がきずいた時にはもう、新陽さんの姿はなかつた。代わりに手に持つていた、剣が近くに落ちてきた。僕は体を転がるようにして縄を切ろうとした。

「つむかこと殺すつていつたよな？」
「さて、出てきてくれよ？」
「じゃないと、こいつからいくぜ？」
「おつと、せつかく隠れていたのに、鼻がきく化け物ですね～」
「ぐじにはペリット管つて器官があるからな。」

「これで、大抵の生物は隠れていても見つけられる。」

「そんな事はどうでもいいんだ。」

「お前うまいそうだな。」

「1000年くらい何も食べてないんだ。」

「さつき私の駒を食べたじゃないですか。」

「あんな小物食つたうちにはいらねえ」

「お前がほしいんだよ。」

「私はたべられる気なんてさらうないですよ？」

「だいたい、戦つたら私が勝ちますよ？」

「ほお？おもしろいな。」

「じゃあ、どっちが強いかためしてみないか？」

戦闘態勢入った、フレイデュウスがバルонに襲いかかった。

バルонも新陽さんと同じように丸のみにされたかのように見えたが、やはり、格が違う、食べられる寸前のところで、避けていた。

「まったく、血の氣の多い化け物ですね～。」

「まあ、私もあなたと戦つたらどうすまないでしうからね。」

「だから、ここは引かせてもらいます。」

「待て！…にがさん。」

「でわいきげんよう。」

そう言つて、地面に転生石を叩きつけてどこかへ行つてしまつた。

「ツチ逃げられた。」

「あんなごちそう久しごりだつたのに。」

「さてこれから、じつするか」

フレイムデュウスがなやんでいる間に新陽さんのワザリストで縄を切る事に成功した。

それがだめだつた。

内心ホットしてしまつて、気配を断つ事を忘れていた。

「この臭いはアイツと同じ匂いがするぞ！……」

「不知火の臭いがするぞ」

「おい小僧、お前不知火の末裔だな？」

「なんのことか、まつたくわからない。」

「とぼけても無駄だ。お前とそこにある娘はアイツと一緒に臭いがする。」

「しまった。蘭を忘れていた。」

周りを見回してみると、蘭が近くの木の根にうつ伏せて倒れていた。僕は新陽さんのルーツを地面から抜き、急いで蘭のところに行つて蘭を少し強引に起こした。

「おい蘭早く目を覚ませ！」

「うん？ 兄さん？ なんで？」

「そういえば、大変です。兄さん！ …」

「新陽が謀反を！」

「知っているよ。」

「つてえええええ！ …なんなんですか？」

「あの大きい蛇は？」

「説明している暇はないよ。」

「早く逃げよ」

そうしようとしたとき、フレイムデュウスが甲高い咆哮を放つた。ぼくたちは、殺気に当たられて動くことすら、かなわなくなつた。

「逃がす訳ないだろ？？」

「お前たちはいたぶつて殺してやる。」

フレイムデュウスは尻尾を高く突き上げてそのまま勢いよく地面に叩きつけた。

「ドコオオオオオ」

僕たちはその尻尾から放たれた風圧でブツ飛ばされた。僕と蘭は木に体を叩きつけられた。

「キヤアアアアアア」

「うわあああ」

僕と蘭は木に叩きつけられた。

僕はなんとか立ち上がり蘭の元へ行つた。

「蘭動ける?」

「すいません。無理そうです。」

「肋骨を2本ほど持つていかれました。」

「兄さん お願いです、私の事はいいですから早く逃げてください。」

「嫌だ!!!」

「僕は絶対蘭を助ける。」

「だから、最後まであきらめないで。」

「でも、このままだと兄さんが!!!」

「大丈夫、蘭だけは絶対に守るから」

そう言つた後、自分は死んでもいいから蘭だけは助ける事を誓つて、剣をもう一度握り直してフレイムデュウスに真っ向から挑んだ。

「グハハハツハハ」

「いい度胸だ小僧。」

「だが、俺は手を抜くつもりはないぞ。」

僕は新陽さんのルーツをつきたてたが、真つ二つに折れてしまつた。

「グハハハハハハ、そんなんまくらで俺の鱗が切れるとでも?」

「くそ!!!」

「もう飽きた。さつさと死ねい!!!!」

尻尾が僕にダイレクトに当たつた。

「グアツアア」

「他愛も無さ過ぎるぜ。」

「不知火と言つても、所詮はまだ、小僧か。」

「痛い、全身が痛い。」

多分体のあちこちを骨折している。

指一本も動かせられない。

フレイムデュウスがこっちを見おろしていた。

「そんなものか?小僧?」

「もう終わりなら、お前をいただくとしよう。」

そつ言つて、フレイムデュウスは、ぼくを丸のみにしようとした。

だが、

「何でお前全然マナが感じられない。」

「気持ち悪い奴だな。こんなやつ食つてもたいして腹を満たせない。」

「

「そう言えば、もう一人小娘がいたな。」

「ならば、そつちの娘を貰おう。」

「な！」

「お前え！－！蘭には手を出すな！－！－！」

「ほう。まだしゃべれたか。」

「だが、お前に興味はない。」

「消える。」

フレイデュウスは、口から紫炎の炎を出そうとした。

「兄さん逃げてええええええええええええええ－！」

「クソオ！－！－！－！」

僕は地面を力いっぱい殴つた。

「僕にもつと力があれば、蘭を守れるのに」

「お願いだ！僕に守る力を－！」

「大切な人を守れる力を」

だけど、現実は虚しく紫炎の炎に巻き込まれて、何もわからなくなつた。

絶体絶命（後書き）

感想、アドバイスよろしく！！！

外伝英乱編（前書き）

今回は外伝なのでかなり短いです。
次回は遊離の特殊アビリティーが発動します。
でわ短いですが、8話です。

英乱 side

PM8:00

俺はちよづど自分達のギルド「不死鳥の縁えにし」から受けたクエストを終わらせて帰つてきたところだった。

「英乱様!!」

メイドの一人があわてた様子でこちらに向かつてきた。

「なんだ? 騒々しい」

メイドはとても慌てていたのか、

「あの、あのですね、その、えとその、」

俺は落ちつけとそのメイドを落ちつかせる。

やつと落ち着いたのか、メイドが話し始めた。

「遊璃様が、禁足地へ向かつたようです。」

俺はなぜ、遊璃が禁足地の事を知つているのか疑問に思つた。あいつにはまだ禁足地について教えて

話していなかつたはずだ。

「だいたいなぜ、遊離が禁足地に向かつたとわかるんだ?」

メイドは

「それは、遊離様の机に英乱様宛の手紙と机にフレイルの森に行つてきますと、書置きがありました。」

「そこで、フレイルの森をしらみつぶしに探しましたが、見つかりませんでした。」

「なので、あとは禁足地だけという訳です。」

俺は禁足地に入ったのか?

と聞いた。

「それは新陽様達が自分達に入るから、禁足地に入れる人以外入るなと言われたらしいので、禁足地の前で待機しています。」

これが手紙です。といつてメイドが渡して來たので、

俺は手紙をメイドから受け取り中を読んで見た。

「お父様、僕はもう生きることに疲れました。もう死のうと思いま

す。」「こんな不甲斐ない僕を許してください。」

「遊璃より」

と書かれていた。

俺はこの手紙を読んでおかしいところがあると思つた。

なぜなら、遊離は生きることをあきらめるよつなやつではない。

それなら、魔法を使えない事を知つた時点で、自殺していただろう。

だが遊離は、決して自分から田を背けなかつた。

自分の長所を生かそつと必死で修行をしていたことは、知つている。

だから、この手紙は、誰か違う人物が書いた。

「嫌な予感がする」

俺はそう思つた。

俺は、搜索に行つてゐる者に連絡できるかメイドに聞いてみた。

メイドは、急いで、無線機で搜索にいつてゐる者に連絡してゐた。

しかし、

だれも無線に出る者はいなかつた。

俺はメイドに

「JAPAN領内にいる全術者に通達、急いで禁足地にむかえ!...」

そうメイドに指示した。

メイドが

「乱英様は?」

俺は服を着て

「先に向かう」

そう言つて走り出した。

~~~~~

俺は木から木へとできるだけ、早く移動していた。  
もつ少ししたら、禁足地に着く。

運悪く、転生石がきれていたので走らなければなかつた。  
「良し。あと少しで着く」

そう思つた。

瞬間、ガガガガガガガガガガガ

森全体に地震が起きたのかと思つてからに揺れた。

「まさか、そんなバカな。」

「誰だ？ こんな事を思いつく奴は。」

「まさか、」

俺はこんな事をする奴らを知つていた。

「ブライダルケミスト」

世界を混乱させる事ならなんでもやるレッドギルドだ。

昔そこのマスターと派手にやりあつた事がある。

そんな事を思つていると

「お願い助けてくるしこよ。おお。」

そんな声を聞いた。

空を見てみると

森を守つてる精霊が苦しみ泣きながら死んでいつてしまつた。

「すまない。今までよく頑張つてくれた。」

そう言つて死んでいつた精霊に黙祷を捧げるていると

「ゴゴゴゴゴ」という音がさらに強くなり紫の炎が蛇が姿を現した。

「やつぱり、出てきてしまつたか、フレイムテュウス。」

「そうか。俺も覚悟しなくては・・・な」

そうおもつてると、フレイムテュウスが口から紫炎の炎を出し周りの木を焼き払つた。

「ツチ早く行かないと。」

俺は急いで禁足地に向かつた。



感想アドバイスお願いします。

## 少年少女の激闘（前書き）

はーい。紫苑です。

更新遅くなりました。マジすいません。。  
何してたかって？

テイルズに浮氣していました。

いやー面白すぎて、3週くらいしてしまいました。  
ミラさんがとても可愛くてずっと使つてました。  
ジユード君は最初つじうじしてなんだこいつ？  
つて思つたけど、最後の方とかマジ格好良かつた。  
アルヴィンは、ロリコンになっちゃいましたね。

でも、杉田さんのあの渋い演技は大好きです。

ローレンはいいお笑いキャラしてましたね。

エリーゼは将来に期待ですね。

あれ絶対美人になると思います。

えーとあとレイア？

個人的にあんま好きじゃないです。

レイア好きな方どうもすいません。

でも武器はかつこよかつたです。

俺も免許皆伝したいです。

まあ長く語りましたが、9話です。

至らない部分はありますけど見てやってください。

BY 紫苑

目を覚ますと闇の中に僕はいた。

「あれ？僕、フレイムデュウスに殺されたはずなんだけど…」  
見た感じ、服も髪も焼けた様子がない。

卷之三

「誰もいないし、何もない!」

「おひぱり、儀比 ひびやつ 二のがね、

自然に涙かこぼれた

疾が止まひなかつた。

拭つても拭つても、抑えつけようとしても無理だった。

「結局僕は、蘭を助けられなかつた。」

「何が絶対守るだ！！」

卷之三

「クソオ、クソオ」

۱۱۷۸

ああああああああああ  
「あ

少年の雄たけび、何もない空間に悲しく響いていた。

（s i d e 蘭）

兄さんに向かつて紫の炎の大きな塊が飛んで行つた。  
それを私はろつこつを折られて、見ている事しかできなかつた。  
でも見ただけでわかる、あんな物に当たつたら大人でも死んでしま  
う。

「兄さん逃げてえ——」

私は悲鳴に近い声で叫んだ。

でも、さつき受けた攻撃で兄さんは一歩も動けなかつた。  
怪物は勝ち誇つたように笑つている。

「グハハハハ跡形もなく消える小僧」

フレイムデュウスがそう言つたとほほ同時に紫の炎が兄さんの体を  
包み込んだ。

「嘘、」

「そんな・・・こんな事」

「嫌あああ————————————」

「嫌ですよ、兄さん」

「私を置いてかないでくださいよ。」

「ずっと一緒に つて言つてくれたじゃないですか。」

私は泣きながら叫んだ。

「茶番は済んだか？」

「なら次はお前だ。」

うれしそうにフレイムデュウスが私を見てきた。

「一つ質問していいですか？」

私は杖を取り出しながら聞いた。

その時の私はどんな顔していたでしょうか？

そんなことはわかりません。

だけど、私の頭の中は怒りと悲しみだけが支配していました。

「どうした？ 食われるのが怖いのか？」

グハハハハと怪物が笑った。

「さつき茶番つていいました？」

「言つたぞ。あんなマナがもない糞餓鬼を相手してやつただけでも  
ありがたくおもつ」

「黙れ！……」

私はフレイムデュウスの言葉をさえぎり

「兄さんは、マナや魔力がなくたつて血が滲むような努力をして、  
人一倍、魔法術を使えるように頑張つてました。」

「あなたごときが兄さんを語る資格はありません！……」

「兄さんを侮辱した事を絶対許しません。」

「覚悟してくださいね！……」

でもなぜでしょ？ わきまで悲しみと怒りだけのわたしが兄さん  
の事を思うと胸が高揚する。

ひとつひとつ痛みなど気にならなくなるようなこの感覚、  
今ならなんでもできる気がします。

兄さん、あなたの仇は絶対取ります。

「グハハハハ、おもしろいぞ、小娘エー！」

「……やれやれ、やれやれもんなんぢやつてあります……」

アーティストによるアーティストのアート展

私は、ギリギリの所で避けながら魔法を唱えた。

「これ何が珍しい？」

「炎の精靈よ、私に力を貸してください」

## フレイジングショット!-

私の放った矢は新陽さんが傷つけているかもしない鱗に向かつて

「ジロ本

という音に期待を

「なんだ？ さっきの攻撃は？ そんなものの何発撃つたって意味がないぞ？」

「だったら、何発でもあなたに撃ちこみます。」

「威勢がいいよ。

「だがこれは避けれるかな？」

フレイムテロウスはまた同じよう炎弾を撃つてきた。

かに、この攻撃に却敗慘憺たる二枚にしかたない、一途に木にい

「それま先づ読んで一まず

私は右に回避した。

炎弾は」」方に向かって飛んできた。

卷之二

まいかじきがくは、規則的には次第を擧ててきたりは」この時のための有

クツ誘いこまれた！！

まったく思いにもよらない攻撃だったので、避けきれなかった。

「グハハッハハ

「終わつたな

俺が放つた炎弾は相手を追尾する魔法だつた。

そんなことも予想できんて、まだまだだな。

まあ、まだ幼いから、しょうがないか。俺を敵に回したのがわるかつたな。

おそらく意識を刈り取るくらいの威力であてたから、大丈夫だろう。しかし、俺の予想を斜め上を行く展開が起つた・・・・・

クツ、ぎりぎり間に合つた・・・とは言いにくいですが、生きているから良しとしましょ。

片腕をもつていかれましたが・・・  
フレイムデュウスは嬉しそうに、高笑いしている。

「グハッハハハハハ、あれを防ぐとはやはり喰いがいがある娘だな。

」

「私なんか食べたら、お腹壊しますよ

「グハハハ、口が減らない娘だな」

「だが、右腕は間に合わなかつたみたいだつたな?」

そう、私はあの瞬間、自分でも最速で詠唱できる防御魔法術「フレイジングホールド」を唱えた。

相手も炎だつたので、私程度の魔法術でも防げましたが、魔法術を発動させるために突き出した右手が焼かれました。

「痛ツ」

ジンジンと痛さが体に広がつてくる。

「グハハハハ、だが休んでいる暇なんてないぞ？」

フレイムエイガスが、また炎弾を次々に撃つてきた。

右は左は時にはハ・クステ・ハで過いでいましたか？

「え？」

氣づいたら、毎日投げ出されていた。

そこをハロイムで一々逃すはずかな？

「終わりだ」

尻尾をおもいつきり叩きつけて、風を起こした。

和は指揮もできずは後ろの木は背中から叫き一叶せれた

後頭部を打ちつけたのか

目に全く焦点が合わなかつた。

しかも、だんだん気分が悪くなつてきた。

でも負けられる訳がなかつた。

兄さんの仇を取るまではまだ寝てはいられない。

れ  
な  
!。

「ハアハア」

私はなんとか立ち上がりたがそれだけで、体に激痛が走り、走ると二歩か歩くこと走できなかつた。

「グハハハハ、もうやめておけ、もうお前では無理だ」

「勝手に決めつけないでくださいーー！」

「立っているのがやつとの癖に何を言っている。」

「だいたい、こっちは腹が減つて死にそうなんだ」

「いろいろ邪魔がはいつたが、もう我慢の限界だ。」

そう言つて、フレイムテュウスが大きな口を開けて私を食べようとした。

「兄さん、私頑張りましたがやつぱり、ダメでした。」

「ねえ兄さん私もここまでなのかな・・・?。」

「死ぬ前に兄さんにもう一度会いたかったな。」

私は死ぬ覚悟を決め、目を閉じた

＼＼＼ side 遊璃＼＼＼

この空間に来て何時間たつたかわからない。もひ、泣きすぎて涙は枯れてしまった。

「じめん蘭

「僕はやつぱり無力だ・・・」

「僕にもひとつ守る力さえあれば・・・」

「お主はそこで諦めるのか?」

「え?」

不思議な声が聞こえた。

「だから、お主はなにもかも諦めて、人生を終えるんじゃな?」

「諦めるも何も、僕死んでるし・・・。」

「あー暗いのう。」

「もうちょっとテンション上げられぬかのー」「ため息が聞こえたがどこでいるかまったくわからなかつた。

「無理です。」

「だいたいあなたは何者ですか?」

僕もため息をつき質問した。

「ワシか?」

「そうじやの~」

「お主の全てを知っている者とでも言つておへかの~

「ああそうですか。僕忙しいんでもた来週  
そう言つて僕はどこかに行こうとした。

「ちょっとまつたんか、最近の若いもんは年寄りの[冗談にまつとは  
付き合つてくれないのかの~」

「ワシは悲しいぞ。」

「さつきフレイムデュウスに殺された不知火遊璃君」

「・・え?」

「なんでそのこと。」

なんなんだ?この人。

声はするのにどこにいるかまったくわからない。  
それ以前に気配がない。

「だーかーらーさつき言つたじやる?」

「お主の全てを知つてている者だと」

「産まれる前からの」

「そして、産まれてからどんな人生を送つたか

「ワシは嫌、ワシたちは全て知つてある」

「・・・え、それってストーカーって事?」

「ちがうわい！」

そう言って、立派な黒色の髪を生やした身長160センチほどの優しそうな目をした老人が姿を現した。

見た目は、青色のローブをかぶつた普通の老人だ。けど、それ以外は「異質」体から子供の僕ですらわかるほどの異常なマナを纏っていた。

しかも、あれだけ注意深く捜したのに僕の背後からでてきた。昔からお父様に耳にたこができるほど言われ続けたこと。

「いいか。遊璃？」

「相手には必ず背後を取られるな。」

「殺されるぞ？」

そう何度も叩き込まれてきたはずだったが、普通に背後を取られた。

魔法か？

でもどんな？

「どうしたんじや？ そんなに難しい顔して？」

「そんなん、背後をとられたのが悔しいのか？」

老人はニコニコしながらたずねてきた。

「いい性格してますね。」

「ホント。」

「だいたいその異常なマナと言い」

「本当にあなたはいつたい何者ですか？」

「ワシか？」

「ワシの名前は・・・」

老人は懐かしむような声で

「ワシの名は大精靈、名をアトス！！」

「はじめまして、 になるかな？」

「我が主よ。」

そう言って

アトスは、 片膝をつきお辞儀してきた。  
ぼくはと、

「・・・・・・・へ？」

「え？」

「ちょっとまって、」

「大精靈？」

僕はびっくりしそうで、 自分が何を言つて いるかわからない始末だ  
った。

本来、 大精靈とは、 色精靈を統べる精靈の事で、 まず人の前にはあ  
まり姿を現さない。

だが、 特定の人物のマナの波長が合えば、 人の前に姿を現し人と、  
「契約」する大精靈がいる。

大精靈と「契約」する時に膨大な魔力とマナがいる。

大精靈との「契約」は、 色精靈を統べるという仕事が任される。  
色精靈も普段は、 姿を現さないが、 大精靈と「契約」することで精  
靈が見やすくなる。

さらには、 大精靈がもつて いる特殊な力を使う事ができる。

だが、 発動条件がさまざまで、「契約」しても、 必ず大精靈の力を  
使える訳ではない  
人は、 大精靈の力を使える魔法術者を「精靈と契約した者」と呼ぶ。  
「アビリティア」<sup>アビリティア</sup>がこの世界に何人いるかはわからないが、 ごくわ  
ずかしかいないのは確認できている  
らしい。

だが、 僕は疑問に思つた事がひとつあつた。

「我が主つて？」

「僕つていつアトスと契約したの？」

「まあ待て。今から全て話す。」

「お主は魔力が全くないな？」

僕はうんと答えた。

「それはな、ワシたちがお前の中のマナと魔力をすべてもらつてゐるからじや。」

「どうゆう事？」

「お主は、孕んだ時から、膨大なマナを持つていた。」

「だが、マナが多すぎて赤ん坊のお主の魔力の許容量をとつぐにオーバーしてあつた。」

「もし、このまま出産すればお主の命が危ないと思つたのじや。」「そこでワシたち、三人の大精靈がお主の魔力を減らすために仮契約をしたのじや。」

「え？ ジヤあ僕、後二人の大精靈と契約しているの？」

「そう言つ事になるな。」

「でも、僕もう死んじやつてるし・・・」

「あーお主はまだ死んでないぞ？」  
めんどくさそうにアトスは答えた。  
「え？」

アトスによると、僕がフレイムテュウスに殺される直前に僕「」と、この空間に飛ばしたらしい。

僕を助けてくれたのはいいのだが、あわててやつたので、どこに飛ばしたのかわからなくなつたらしい。

僕がどうやってこんなとこに飛ばしたの？  
そう聞くと、アトスは大精霊の嗜みじや。  
とすこい勢いで話をばぐらかした。

「それじゃ僕生きてるの？」

「そういうてるじゃろ？」

「して、お前はどうするんじや？」

「不知火遊璃」

今まで、ふざけていたアトスがまじめな顔をして聞いて来た。  
「どうするつて？」

「お前もアホじやあない。」

「すぐにでも妹を助けたい。だが、自分にはフレイムデュウスを倒す力がない。」

「だから、どうしていいかわからない。」

「そんなどころじやう？」

「何か方法はあるの？」

とりあえず、自分には何の打開策もないで聞いてみた。  
どうやら、この老人は、僕の事を本当に知つてゐるみたいだ。  
だけど僕は、はつきり言つてこの老人の事をあんまり信用してない。

なので相手の腹を探るつとしたんだけど・・・  
アトスは「ハア～」とため息をつきながら

「そう警戒するな。」

「まあそう言つても無駄じやうつな」

「お主をそう言つ性格にしたのは紛れもなくワシらのせいじゃしない  
どこか懐かしいような遠い目をしていた。

なんか、感傷に浸つてゐるみたいだから

「で？」

「結局方法はあるの？」

「あるんなら早くしてよーーー！」

僕は今蘭の安否が早く知りたかった。

だから老人を急かした。

「遊璃、お主はあの娘の為に命を差し出す事はできるか？」

「どう言つ事かさっぱりわからないから説明してくれない？」

「そうだったのう。」

「悪かつた。」

アトスは右手を振つた。

すると上から長剣のようなものが降つてきた。  
長さは1㍍とちょっとで、僕の背より大きい。  
その長剣もどきは黒と縁を合わせたような色をしていた。  
しかも初めて見た武器なはずなのに、遠い昔から知つてゐるような久  
しぶりに会つた友達のような感じがする。

「何この武器？」

「見たこともない。」

アトスはドヤ顔で

「それは刀という武器でな、昔の友人が使つていたものだ。」

「名を神楽と呼ぶ。」

「へえー」

「でも、この武器すごくマナと魔力があるね。」

そう言つて僕が、刀に触ろうとした時、

「触るな！！」

アトスが怒鳴った。

「その刀には触れるな！！」

「その刀は自分を主と認めていない者の魔力を吸い取ってしまう恐ろしい武器なんじゃ。」

「ええええ！！！」

「何それ？めちゃくちゃ危ないじゃん。」

「だがな、神楽は魔法術を斬ることのできる唯一の武器じゃ」

「フレイムデュウスの鱗を破壊するには、神楽を使つしか手はない」

「じゃあこの武器があればフレイムデュウスに勝てるんだね？」

「100%ではないが高確率で勝てる。」

アトスは答えた。

僕が質問したのは理由があった。

僕はどうしてもアイツにひと泡ふかしてやらなければ気が済まなかつた。

蘭を泣かせたことを後悔してもらわないと。

「さらにもう一つワシの我がままなんじゃが・・・」

申し訳なさそうにアトスは話をきりだしてきた。

「何？」

「おそらく、フレイムデュウスを殺す事はできないじゃね？」

「あやつは、自分が危なくなると、異次元に逃げようとするからな。」

「あやつが異次元にのがしてしまえば、殺す事はまずむりじゃ。」

「だから、あやつが逃げる前に完全に封印する」とこした。

「」

「アトスそんなことできるの？」

「封印術って難易度AAの超高等魔法術だよ？」

そう、封印術はかなり難しいもので五大貴族の領主でも5人のうち3人しかできない魔法術だ。

そんなことがもしできるなら、アトスは間違いなくランク魔法術使いだ。

「できるが条件が一つあるんじや。」

「それって何？」

「僕も何か力になれるようなことがある？」

アトスはその事を少し詫ひのを迷つたようだけば重々しく口を開いた。

「それは、人間一人分のマナじや。」

「え？」

「どうじこひ」と？」

「簡単に言つとな、わしはフレイムデュウスを完全に封印するためお前の命を差し出せと言つているんじや。」

「どうじや本当に我儘な爺じやう？」

自嘲氣味にアトスは言つてきた。

「で、どうするんじや？」

「不知火遊璃？」

「妹を見捨ててこの空間について、事が済むまでいるという選択肢もあるんじやぞ？」

「それともワシに命を差し出しフレイムデュウスを完全に封印するのか？」

「お前には選ぶ権利がある。」

「自分で決めるんじや。」

「僕は・・・・・

僕の答えは最初から決まっていた。

答えはもちろんYESだ。

これまで、情けない兄だつた。

だけど、そんな僕でも、兄として妹を助けたかつた。  
だいたい、わかつていた。

魔法を斬る事が出来る武器「神楽」。

なんのリスクもなく使えるわけがなかつた。

神楽を使う時点で僕の体を構築しているマナが枯渇して、僕の体は  
原型を留めることはたぶん無理だろう。

僕は死ぬ。

どう言葉を繕つても事実は変わりない。

だから、アトスは僕の命を少しでも役立ててくれようとしているの  
だ。

そんなアトスに

「ありがとう」

心からお礼を言った。

アトスは不思議そうな顔をしたが。僕は質問した。

「僕は何分ぐらいその刀を持つて何分ぐらい持つの?」

「そうじやのう」とうなりながら

「お主との仮契約を破棄する。」

「契約を破棄すれば体の中に魔力が戻るだらうから持つても10分  
つてとこじやのう。」

老人は苦しげに漏らした。

アトスも僕の答えが最初つからわかつていたのかもしれない。

だから、僕はYESかNOは言わなかつた。

かわりに、

「上等だよ。それだけ時間があれば大丈夫だよ。」

僕は老人に笑いかけ、

「 さあ 反撃開始だよーーー！」  
そう言って、神楽を手にした。

## 少年少女の激闘（後書き）

感想とか感想とか感想とかアドバイスがあればお願ひします。  
大事な事だから3回言いましたぜ！！

## 契約解除（前書き）

ども紫苑です。

今回はかなり短めです。

別に手を抜いたわけじゃないですよ？（ただ1週間後期末テストがあるんで）

2回目ですが手を抜いた訳じゃないです。

そんな筆者の10話目が

神楽を持った瞬間、熱いやかんに触った時のよつて手を引っ込んだ。

「熱ッ」

「なにこれ？」

「熱くて持てないんだけど？」

「どう言う事？」

せっかく意気込んだのに・・・

「当たり前じゃ バカ、まだ契約の解除をしてないじゃん。」

「マナがないなら、神楽が拒否するのは当然の事じや。」

「拒否つてまるで、神楽が生きてるみたいだね。」

「せうとつじもひつてかまわん。」

「神楽には、精靈が宿つてゐる。」

「ふ～ん」

ん？なんか聞き捨てならない事を言つたような？

「ねえアトスさつき神楽に精靈が宿つてゐるとか言わなかつた？」

「それつて冗談だよね？」

「冗談などではないわい。」

「お主にマナが戻つて、神楽に触つたら、向こうから接触してくるじやん。」

「ホントに？」

「信じられない。」

「武器に精靈が宿るなんて・・・」

「武器は、やつぱりいろいろな常識をぶち壊してゐる。」

「まあ普通に考えたらあり得ないんじゃがな。」

「どんな人なの？」

「僕はその精霊にけつこう興味があつた。いつたいどんな精霊が宿つているのか。

「一言でいうと気難しい女じやが、気に入つた相手ならけつこう気さくに接してくれるはずじや。」

「手の甲にキスでもしてみたらどうじや？」

「えええ！－！」

「そんな、僕絶対無理だよ。」

「僕、人見知りだから、女人の人と喋るのも無理なのに手の甲にキスなんて無理無理。」

「大丈夫じや。」

「お主のナンパテクでなんとかなるはずじや－－！」

「ほ、僕はナンパしたことないよ。」

「まあなんとかなるじやろ。」

「ならないよ！－！」

「僕は盛大な突っ込みを入れた。

「はあ－」

「まったくもう。」

「ほんと計画性がないんだから」

僕は顔に手を押されて、今日何度もわからぬため息を吐いた。

「冗談はさておき、そろそろ契約解除するが。」

うん。

ぼくは短くそう答えた。

アトスはうなずいた後、紫色の魔法陣を展開した。

そして、詠唱の言葉を紡ぎだした。

「太古の縁、我が盟約よ天音の奏宴に終焉を、終われ、かの者夢よ

「我、盟約を破棄する者なり、束縛した魂、今、主のもとに帰れ」

「エネミケー シヨン！！！」

詠唱が終わったアトスの体から赤色の光が出て、僕の体の中に入つていった。

その瞬間僕は、本来の力を取り戻した。

「ドクン、ドクン」

と心臓がいつもより速く鳴る。

体が軽い。

なんだこの感覚。

空いていたパズルのピースが今埋まつたみたいな感じがする。

「これがマナなんだね。」

「そうじや。」

「どうじや？ 力を取り戻した感想は？」

「なんか体がポハポハしてる感じがするよ。」

「そうか。」

「その感覚に慣れるに時間が少しかかると思つ。だから少し休め。」

「いやいいよ。」

「もう慣れたよ。」

「嘘をつけ。」

「普通の人間なら丸一日氣絶してもおかしいはずなんじゃぞ。」  
「せつときは黙つておつたが、この魔法もほとんど掛けのよな物だつ  
たんじや。」

「意識があるだけでも十分すごいんじゃ。だから悪い事はいわん、少し休め。」

「アトス、僕を心配してくれて、ありがとう。」

「それに、早く蘭の所にいかなくちゃならないんだ。」

「僕に行かせて。」

儀は方丈の門をじっとみた

30秒ほどの間を舐ねていた。

卷之三

やつはいなかで迷回こてしまつた。

「ありがとう」

そう言つて神楽を握つた。

「氣をつくるんだ」やで。

と囁ひの声がせりえたので、

僕はまた苦笑し

さうつげて神樂を醒つて、この武器に面つていの精靈に心の舟で話

しかけた。

契約解除（後書き）

kannsouyourosikunonegaisimmasu . . .

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6870s/>

---

強さの定義

2011年11月29日17時57分発行